

平成 25(2013)年度

NGO 海外スタディ・プログラム最終報告書

提出日	2014年3月10日
氏名	鰐部行崇
所属団体	特定非営利活動法人日本リザルツ
受入機関名(所在国)	バングラデシュ
研修期間	2014年11月7日～2014年2月16日

研修テーマ	BRACでマイクロファイナンスの実施運営の実態を学ぶ。特に貧困層に対するマイクロファイナンスのインパクトを検証する。その後、当団体のマイクロファイナンス活動の実践強化に応用し、国際貢献活動の拡大を図る。また本邦のマイクロファイナンス分野のODA発展に向けたアドボカシー活動の参考にする。
全体研修目標	BRACマイクロファイナンス部門で実地研修を行う。スタッフと日々業務に接してマイクロファイナンスの実態を把握するとともに貧困層がマイクロファイナンスの活用によってどのように生活の改善が図られているか検証する。また保健部門等他部門とのどのような連携活動が持てるかという視点でも検証する。またマイクロファイナンス以外のソーシャル・ビジネスとマイクロファイナンスの関連、協調の可能性についても観察する。

具体的な研修内容

(11月)

- ・ BRAC 訪問。ガイダンス等を受ける。当方から研修目的等を説明する。
- ・ マイクロファイナンス部門のスタッフ及びマネジメントから講義を受ける。
- ・ 地方研修に赴き、マイクロファイナンスの現場に訪問する。
- ・ 政治情勢が急速に厳しくなる中、外出が厳禁となり研修センターに終日滞在。センター内の研修等に適宜参加する。

(12月)

- ・ 教育プログラムでは幼稚園、小学校、青少年育成、卒業生、地場の教育 NGO へのサポートなど各フィールドを訪問。BRAC の教育分野全般をカバーする包括的戦略を把握。
- ・ ラーニングセンター内で BRAC が 96 年頃に実施した、保健やその他の活動における自己事業のインパクトリサーチの論文を読了。
- ・ 保健プログラムでは BRAC のコミュニティ・ヘルスワーカーにインタビューを実施。また実際に村でのヘルスワーカーの活動も随行訪問して体験。
- ・ ハルタル(暴力的なゼネラルストライキ)の合間に再訪問したマイクロファイナンスでは村の会合へ参加し、その後の支店での実務等も視察して全体の手続きをほぼ掌握。
- ・ エンタープライズ部門ではミルクを製造する BRAC デイリーの業務と BRAC の系列財団の縫製工場を訪問して事業活動を視察。

- ・ 地方視察から戻った後は、本部内で調査評価部門、ドナー・リエゾン・オフィス、パートナー強化部門、国際部門、保健部門、農業&食糧安全保障の各部門を訪問し、部門マネジメントとの面談を重ねることで業務への理解を促進。

(1月)

- ・ ダッカ市最大のスラムである Korail 地区でのマイクロファイナンス実地研修を実施。スラム・メンバーとのミーティング、新規借入れ申し込みなどの実務を詳細に確認。また支店における承認手続きと会計処理、ファイナンス実行までのプロセス、多重債務者に対する対応、延滞債務者に対する交渉などについて実地で研修。
- ・ BRAC が独自に開発した最貧困層向けの自立支援プログラムである CFPR-TUP の STUP (極度の貧困層) メンバーや OTUP (相応の貧困層) メンバーにインタビュー実施。またそのプログラムのため、BRAC が設定した SDBC (スラムの委員会) と協議。CFPR-TUP プログラムの担当者に行きして日々の活動を視察。
- ・ マイクロファイナンスプログラムに戻り、スラムにてマイクロファイナンス実務交渉を再確認するとともにローンレビューオフィサーに同行して業務を把握。マイクロファイナンスプログラムにおいて、商工業者向けに特化した Progoti というタイプのローン手続きについても実地研修を実施。
- ・ 都市での保健プログラムに参加してリプロダクティブヘルス及び結核対策を視察。
- ・ BRAC イノベーションフォーラムに参加して、SHIREE という地場で大規模な活動をしている NGO の最先端の試みを把握。

(2月)

- ・ BRAC 国際部門、Gender Justice & Diversity、BRAC エンタープライズの研究などレポートに必要なプログラムや部門の研究作業を実施。
- ・ 研修報告書に必要な情報の収集を行い、本報告以外に独自に纏めた研修報告書の完成作業に従事。

研修の成果

(目標に対し達成できなかった内容がある場合は、その理由とあわせて報告してください)

1. BRAC マイクロファイナンスプログラムの実地研修と講義の成果

- (1) BRAC のマイクロファイナンスの全体像はほぼ理解できた。また組織構成、各セクションの機能なども把握できるようになった。多くの担当者から各セクションで行っている業務を聞くことができ全体像と細部を比較できるようになった。
- (2) 特に村の会合に参加して、村の会合の機能、役割分担など全般を把握。またその後、支店に戻った後の会計データへの記入及び照合など一連の作業は確認できた。またメンバーにインタビューを行い、マイクロファイナンスの顧客が融資を受けることで経済的な生活向上を実現できていることを確認。また他のプログラムの相互活用による包括的なアプローチがどのように寄与しているかという観点からも理解を深めることができた。
- (3) BRAC がスラムで展開しているマイクロファイナンスの活動を数日間に亘り、同行訪問することで、より実務手続きの理解を深め、貧困層の女性が新規メンバーになりその後、新規借入れ及び返済を行うまでの一連の流れを掴んだ。都市スラムでは問題が複雑となっている多重債務者や延滞債務者の状況把握と返済交渉などに同道して実態を把握した。更に支店におけるメンバーへのファイナンス承認手続きと会計手続き、ファイナンス実行の様子を観察して、内容の理解を深めた。またローンレビューオフィサーに同行して借入を要請したメンバーの調査方法やチェックする事項を把握した。

(4) 地方と都市における Progoti (商エローン) の実務手続きや顧客とのインタビューを通じて、その利便性や BRAC BANK との棲み分けなどについて理解することができた。

2. BRAC の各プログラム(教育、保健、エンタープライズ)実地研修と講義の成果

- (1) 教育における幼稚園、小学校、青少年育成、卒業生、地場教育 NGO サポートの各プログラムを理解し、BRAC の、隅々まで仕組みが行き届いている幼少期教育の包括的戦略を理解した。
- (2) 保健プログラムにおいては、プログラムの中核的な存在であるコミュニティー・ヘルスワーカーとの面談、随行訪問を実施し、保健インパクトの効果を実感。また結核患者にもインタビューをして実効性を側面的に確認することができた。また都市でのプログラムでは妊婦や胎児のケアなどリプロダクティブヘルスのプログラムと問題化しつつある都市の結核問題について状況を確認し、またコミュニティー・ヘルスワーカーや助産師を利用した取り組みについて理解を深めた。
- (3) エンタープライズ部門への訪問により、事業が村人の雇用や収益に如何に貢献できているかを体感することができた。数多くのプログラムを駆使して村人達の生活を向上させようとする BRAC の底力を理解することができた。
- (4) 貧困層の自立支援を促す CFPR-TUP プログラムでは、STUP(極度の貧困層)のメンバーにインタビューすることでプログラムによって貧困状況から脱出し、生活が改善している状況を確認した。また貧困に陥ってしまった要因などを聞くことができた。また STUP メンバーが経営する店に訪問し、仕事に立ち会うことでプログラムが実際に機能していることを確かめた。OTUP(相応の貧困層)のメンバーにもインタビューすることでプログラムによって生活が改善し、マイクロファイナンスによって収入手段を得ることに成功している状況を確認した。更にプログラム担当者の日常活動に同行することでプログラムの良い点と問題点などを確認できた。

3. BRAC のラーニングセンター内での研修や学習、本部内でのスタッフ部門での講義の成果

- (1) ラーニングセンターでは BRAC の調査評価部門が 1996 年頃に行った保健、社会インパクトに関わるスタディ及び評価レポートに触れることができた。自己の活動再評価と向上を目指す上で統計的なデータを駆使してインパクト調査を行う内容となっており、レベルの高い内容だった。今後の活動を考える上で大いに参考となった。
- (2) BRAC が強みとしているドナーや政府への説明能力の高さを知るためにドナー・リエゾン・オフィスやパートナーシップ強化部署等を訪問して、その取り組みを確認できた。また地方研修で内容が未消化となっている農業&食糧安全保障、保健、ジェンダーなどのプログラムのキーパーソンと面談して確認事項等の潰し込みを行って理解を深めることができた。

4. 研修を纏めた独自の報告作業

- (1) 日本リザルツと親団体である米国リザルツ教育基金に向けた報告の日本語版と英語版の作成作業に従事し、追加で必要な情報を BRAC スタッフから収集することでより論点を明確にすることができた。
- (2) 日本リザルツにおける今後のマイクロファイナンス事業や日本の NGO に対する提言などを纏めることができた。

本研修成果の自団体の組織強化や活動の発展への活用方針、方法

1. 今後の動を考える上での前提

- (1) BRAC のマイクロファイナンスの日々の実務を帯同して観察し、またその考え方や今後のプロジェクトの説明を受けることによって、当団体が本邦や海外でマイクロファイナンスの活動を行う上で大きな糧となった。また今後、本邦でのマイクロファイナンス活動を高めていく上で大きな座標軸を確立することができた。

- (2) 特に重要なのは BRAC が、貧困層の自立を支援する活動の中心にマイクロファイナンスを置いていることである。マイクロファイナンスは生活を安定させて、また徐々に生活を向上させる。何より貧困で消極的だった生活から、自ら積極的に生きようとする方向へ向かわせる自律的な効果がある。フィナンシャルインクルージョンを求める意義はこのような点にあると考える。
- (3) また保健や教育等における包括的なアプローチも重要だ。BRAC においては夫々のプログラムが巨大化して一見すると独立的に動いている。しかし最終的にはメンバーに包括的な支援が行き渡るように配慮している。この点が BRAC のマイクロファイナンスの特徴である。

2. 日本リザルツ単独でのマイクロファイナンス活動

- (1) 今後、団体としてはマイクロファイナンス活動を国内外にて実践して現場で研磨した見識や経験をもとにアドボカシー活動を展開していくことを検討する。
- (2) 本邦では、国立市で当団体と一橋大学経済学研究科の黒崎卓教授、上村和子市議会議員を中心として、日本の貧困問題にマイクロファイナンスの手法を活かしたプロジェクトを立ち上げる予定だ。当団体は中心的な立場で本プロジェクトを推進していく。
- (3) また海外でも当団体はハイチ、フィリピンで支援活動を行っており、これらの地域でのマイクロファイナンスによる貧困対策を検討していきたい。
- (4) 日本では JICA が海外のマイクロファイナンスに対する支援活動を行っている。日本の NGO 団体も参画しており、NGO でマイクロファイナンスに関心の高い団体と関係を強化しながら、研究会やネットワーク活動へ主体的に参画していく。

3. 米国リザルツが主催するマイクロクレジットキャンペーンへの参画

- (1) 米国の親団体とともにマイクロファイナンス活動の世界的なアドボカシー活動にも参画していく予定だ。現在、リザルツの親団体となる米国リザルツ教育基金では「Microcredit Summit Campaign」を展開している。
- (2) これは 2015 年までに 1 億人以上の貧困層をマイクロファイナンスで貧困から脱却させること、1.7 億人の貧困層の人達にマイクロファイナンスへのアクセスを可能にすることなどの目標を掲げて、世界各国で活動しているメンバーとともにキャンペーンを行っている。
- (3) この目標に向けて各国で具体的なプロジェクトが推進され、ポスト MDG 開発目標に向けてファイナンシャルインクルージョンに向けた活動が強化されていく方向だ。この活動に日本のマイクロファイナンス機関として貢献できるように対応していきたい。

本プログラムや事務局側に対する提案、要望等

1. より活用されるために

- (1) 本プログラムは、NGO 団体にとってとても有効なものだと思われる。JANIC で担当されている方からの支援も手厚く随分助けられた。そのような良い内容にも拘わらず、NGO からの最近の利用は先細り傾向にあると聞く。かかる実態が発生する理由として、国内景況にまだ回復感もなく、一頃より注目されなくなった NGO 団体は現在の活動を維持することで精一杯なのかもしれない。人員構成はもとより、マインドやムードとしてもスタッフの誰かを数か月研修を送る余裕が無いというのが実態と言える。
- (2) このような状況下、本プログラムを活かして NGO の底力を付けていく、特に米欧の NGO に負けないレベルまで引き上げるという趣旨で臨むならば、研修者が不在の間に申請団体の欠

員を補充する手当を考えてみてはと考える。即ち、研修スタッフの不在の間、申請団体に一人分のアルバイト代を支給できるようにする。

- (3) 勿論、そのような措置を行っても、仕事の代替リスクなどを理由に申請を控える団体も残るであろう。一方で固定されたメンバーで煮詰まり感が出ていた団体などはこれを機に様々な新しい人材との出会いや既存メンバーのアサインメントの見直しなどの機会に接することができる。単に研修者の個人能力向上以上の貢献があるものとする。

2. より認知されるために

- (1) 本プログラムは今、NGO 海外スタディ・プログラムという名前になっているが、より認知されるためには呼称を少し変えてみてはと考える。例えば NGO スタッフ養成プログラムなど色々考えられる。スタディというところにやや軽い感じがかり馴染んでいない団体もあると思われる。
- (2) また加盟団体のみならず、JANIC 経由で広く宣伝しても良いかもしれない。加盟団体のインターンやボランティアが本件を契機として当該加盟団体に働き掛け、職員になるケースが出てくる可能性なども考慮した情報宣伝活動がより望ましいと考える。

その他

今回の研修の日々と記録と得られた知識と経験をもとに今後の提言を纏めた報告書を作成した。正式に製本されたものは後日届けることとし、取り急ぎ内容を記したペーパーを今回添付する。

また研修に際して、大きな支援をいただいた JANIC の担当者の方々や今回、様々な機会を提供していただいた BRAC のスタッフの方々には改めて感謝の意を表したい。



マイクロファイナンスの現場



コミュニティ・ヘルスワーカーによるケア



BRAC の Branch の前で



BRAC 教育プログラムのメンバーと

以上